

---

## 献 辞

藤 井 洋 子

(英文学科長)

加藤雅子先生は1970年3月に日本女子大学大学院文学研究科英語英文学専攻の修士課程を修了後、すぐに日本女子大学文学部英文学科のL.L.担当助手としてご着任以来、41年間の長きにわたり本学に在職されました。その間、2年間は米国に留学され、一旦、職を離れられたものの、後にも先にも、現在の英文学科で加藤先生ほど長きにわたり、本学に在職された先生はいらっしゃいません。それだけでなく、加藤先生は、日本女子大学附属豊明幼稚園から本学園で教育を受けられていらっしゃいますので、現在に至るまでの60年以上にわたり本学園に在籍され、加藤先生の人生を語ることはそのまま日本女子大学の歴史を語ることに繋がると言っても過言ではないでしょう。

加藤先生は、大変お若くして本学に着任されましたが、その後も、言語学、英語教育などの研究を着実に積み上げてこられました。助手として英文学科に着任された後に、一旦退職をなさり、米国シラキュース大学大学院言語学専攻修士課程に留学し修士号を取得され、再採用後も、1980年からの1年間には、本学の海外研修制度でハーバード大学言語学科客員研究員として、当時、米国で日本語文法研究に大きな光を当てた久野暲先生に師事し、研究生活を送られました。その成果は、その後の先生の研究論文に明らかであり、日本語のトピック・マーカー「は」の働きや、主格「が」の研究、与格「に」の研究、また、それ以前より続けられていた受け身の

---

研究などに見ることができます。

その後、加藤先生の研究の振り子が大きく振れたのは1995年頃からとされます。1995年3月に刊行された『英米文学研究』には、“Recent Research on the Functions of the Right Hemisphere”と題する論文が掲載され、人間の脳と言語についての研究に着手されたことがわかります。その後も、認知神経科学と言語習得、言語発達についての研究を続けられ、2002年度の本誌には、「言語発達と臨界期」、2003年度には、「脳の側性化と言語処理」を発表されています。また、学会においても、「ゼロ歳児（拡張期～なんご期）の音声獲得」（2003年5月、日本赤ちゃん学会）や「なんご期以降の幼児の音声言語——プロソディーを中心に」（2003年9月、日本音声学会）などを口頭発表されています。このようなご研究を積み重ねられ、2004年には『脳と言語の諸相』を上梓され、北里大学より博士論文「言語と音楽の脳活動における比較考察——熟練と臨界期説」で医科学博士を取得されました。その後は、学生の卒業論文においても子どもの言語発達、言語習得、幼児の英語教育などについてご指導をされました。

一方、教育においては、着任当初からご担当されていた視聴覚教育において、ご退職の年まで実習授業をご担当くださり、英文法の授業においても学生の英語力向上にご貢献くださいました。特に、視聴覚教育については、ご在職中に、3度にわたるL.L.教室の改修・新設工事に携わり、細部にわたる施設設備の充実に力を注がれました。

これまでの長きにわたる加藤雅子先生の本学園及び英文学科へのご貢献に感謝申し上げますと共に、今後のますますのご健康とご活躍を祈念しつつ、本書をお贈りさせていただきます。

---